

*「ポレーシエ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう

—チェルノブイリに思いをよせて—

ポレーシエ

クリスマスカードキャンペーン

—ワールド・コロボ・フェスタ 2010 報告—

10月23日・24日、栄の久屋大通で行われた、年に一度のNGO・NPOのピックイベント“ワールドコロボフェスタ 2010”に、ブース出展しました。今年は、新たに参加する団体もあり、また COP10とのコラボレーションということもあって、たくさんの方々で賑わいました。

チェル救ブースでは、毎年恒例となったウクライナの子ども達に届ける「クリスマスカード作りコーナー」を設置。親子連れや中学生のグループ、わざわざこのカード作りのために来たという大学生、去年のピータさんなど、様々な方たちにカード作りを体験していただきました。両日とも天候に恵まれ、また、開放的な野外ということもあり、出展開始からイベント終了ギリギリまで、カードを作成して下さる方があとを絶たず、2日間で約150枚のカードが集まりました。去年、このイベントに来てカード作りをされた方が、今回も、「ウクライナの子ども達に…」と、自宅でたくさんの手書きのクリスマスカードを作成し、持ってきてくださいました。作成されたカードに同じものは一枚もなく、それぞれに趣向が施された、ぬくもりのある素敵なカード。ブース内に飾ると、もうそこは、クリスマス！！

このカードを受け取ったウクライナの子ども達の顔が、目に浮かぶようです。このキャンペーンをたくさんの方々を知ってくださり、毎年続くことをうれしく思います。また、この企画は、毎年 N さま研修生が担ってきました。今年も、周到に準備を進め、当日も大活躍してくれました。

さて、クリスマスカードの発送まで1ヶ月を切りました。皆さんが送ってくださったカードに、折鶴や折り紙のサンタさんやメッセージカードなどを同封して、ウクライナの子ども達に届けます。これから続々と届く皆様のクリスマスカードを日々楽しみながら、発送作業に当たりたいと思います。まだまだ、カードは受け付けています！ 12月14日が締め切りです、たくさんのお待ちしています。(事務局 /Y&Y)



〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名:三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部(店番号 150)

口座番号:普通 6949211

口座名義:特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部 理事長 小牧 崇

郵便振替:00880-7-108610

TEL / Fax:052-732-7172(月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ: <http://www.chemobyl-chubu-jp.org>

クリスマスカードキャンペーン活動報告

みなさま、いかがお過ごしでしょうか。街の景色も日に日に冬の装いとなり、クリスマスの時期が近づいてまいりました。

現在、チェルノブイリ救援・中部では、クリスマスカードキャンペーンを行っています。今年も10月の告知より約2ヶ月が過ぎ、みなさまの温かい思いが、事務所へ続々と届いています。年齢・性別を問わず、たくさんの方々にクリスマスカードキャンペーンにご協力をいただき、嬉しさのあまり、ほっぺたが緩んでしまう今日この頃です。



＜「ワールド・コラボ・フェスタ 2010」の会場にて＞

イベント・大学祭など各地で * * * * *

10月23日・24日に行われました「ワールド・コラボ・フェスタ 2010」（前ページ）におきまして、小・中・高生や学生の方、お子様連れのご家族の方々など、多くの方にご来場いただき、ステキな2日間でした。日本の子ども達がウクライナの子ども達のことを思い、笑顔で楽しそうに作っている姿は、見ているこちらにも微笑ましくなりました。どのクリスマスカードも温かさが詰まっており、必ず現地の子供達を笑顔にしてくれると思います。

また、県内外のいくつかの大学の学生さんより、「大学祭やサークル活動でクリスマスカードを作りたいのですが・・・」と、嬉しい問い合わせもありました。チェルノブイリ原発事故が起きた1986年、その後に生まれた若い方々が、自分のことのように、現地の子供達のことを考え、クリスマスカードキャンペーンに協力してくださる・・・とってもステキな思いで溢れています。

寒くなるにつれ、12月が近づくにつれ、「ウクライナの子ども達へクリスマスカードを今年も贈ろう！」…そう自然に思っただけなのが、僕の理想です。クリスマスカードキャンペーンを通して、カードを作るその日だけでも現地のことを考えてもらおう。これも僕の理想です。

クリスマスカードキャンペーンの締切りは、12月14日（火）必着です。みなさまの思いをお待ちしています。クリスマスカードキャンペーンへのご協力をお願いいたします。（高木）

「やぐるまそう」（名古屋市緑区）で * * * * *

11月17日（水）、名古屋市緑区にある障害福祉サービス事業者の「やぐるまそう」へ、クリスマスカードキャンペーンの説明とカード制作作業の手伝いに行ってきました。

午後1時から、介護対象者の方と付添の職員に、カードキャンペーンの説明を行いました。参考までにと持参した、ウクライナの子ども達に日本からのカードを渡している写真やパネルを見せると、大好評でした。さっそく、介護対象者と付添の職員が、2人一組でカードを制作し始めました。「やぐるまそう」で、既に必要な材料は準備されていて、色紙やキャラクター入りのシールなどが充実していたので、びっくりしました。カードに、特殊なペンで絵を描いたり、ロシア語の学習書からロシア語の文章を抜き出して書き込んだりしました。また、シールや小さな飾りを、カードに貼り付けました。飾りは、のりではなかなかくっつきにくかったので、ボンドで貼り付けるということにもなりました。漢字を書いたら喜ぶかなということで、漢字をカードに書く人もいました。作業中はみんな楽しそうで、「このカードをウクライナの子ども達が受け取ったら、どんなふうを感じるかな」と話していました。住所と名前をローマ字で書くと、受け取ったウクライナの子ども達から手紙が届くこともあるということで、自分の住所と名前を書く人もいました。

ウクライナから返礼として届くカードにも、時々相手の子どもの名前と住所が書いてあります。私は、詳しくは知らないのですが、実際にカードキャンペーンがきっかけとなって、文通が始まることもあるのでしょうか？ それもそれで、ウクライナと日本の交流にはいいことかもしれません。作業は、1時間30分ばかりで終了しました。

短い時間でしたが、楽しい時間を過ごすことができました。今後も、この活動が「やぐるまそう」で続くことを願っています。（塚本）

25周年イベント 2011年4月「第6回 スタツア」企画(案)完成!

来年の4月26日は、チェルノブイリ原発事故発生から25年(四半世紀)の祈念日となります。事故直後は、旧ソビエト体制のもとで、詳細な被害状況が隠されていましたが、私達はその被害の大きさを知り、「放射能の影響により病気に苦しむ人々の支援」を始めました。

今までに行った主な活動は、

- ・被災地の子ども達への粉ミルク支援
- ・被災地や入院中の子ども達にクリスマスカードを贈るキャンペーン(年間約2,000通)
- ・小児病院・成人病院等への医薬品・医療機器などの支援
- ・移住者村にある地区病院や診療所への医薬品・医療機器などの支援
- ・チェルノブイリ事故処理作業等障害者団体への医療支援
- ・放射能汚染地域にあるナロジチ病院への医薬品・医療機器等の支援



＜前回のスタツア風景
(ジャパンデー)(2006年4月)＞

- ・被災地の子ども達への奨学金支援(大学・医療短大等)
 - ・土壌浄化とバイオエネルギーによる汚染地復興事業(菜の花プロジェクト)等があります。
- 私達は、支援には次の4つの段階があると考えています。

- ① 事故・災害などにより、壊滅状態となった現地に対する応急処置的支援(=緊急支援)
- ② 事故・災害などにより、破壊されてしまった社会基盤を元に戻す支援(=復興支援)
- ③ 彼等自身の手で、再び豊かな生活を取り戻すための支援(=自立支援)
- ④ 同様の事故・災害が、再び繰り返されることのないよう、その原因(真因)を究明して、広く世の人に知らしめ、元を絶つ対策を推し進める支援(=社会への提言)

当初、私達は「緊急支援」を目的とした活動をしてきましたが、さまざまな「復興支援」を経て、現在では、現地(特にナロジチ地区)の「自立支援」に軸足を移してきています。

今回のスタディツアでは、「25年後の原発の姿」と「移住を余儀なくされ廃村となった村々」の視察、「被災地に住み続けている人々との交流(日本デー)」、そして何より見ていただきたいのは、私達が進めている「菜の花プロジェクト」の進捗状況です。ポレーシェ誌上で原さんや宮腰さんが報告した、バイオガス発生までの苦勞の成果をぜひ見てください。(菜の花畑や、BDF、BG設備が皆さんを待っています。)

ガスをどのように有効活用していくのかを意見交換したり、斬新なアイデアを発表しあいましょう。

2011年1月末までに電話で事務局まで
申し込み方法は、
費用は、25万円(前回より3万円安価!)

2011年4月		日程(予定)	宿泊地
1	20日(水)	朝 中部国際空港 → 午後 ヘルシンキ	ヘルシンキ
2	21日(木)	午前 ヘルシンキ → 午後 キエフ⇒コーラステン	コーラステン
3	22日(金)	30キロ圏内(チェルノブイリ原発・元プリピャチ市)の見学	コーラステン
4	23日(土)	(学校で交流会) 菜の花畑・BDF・BGプラントの視察	コーラステン
5	24日(日)	廃村の見学	ジトーミル
6	25日(月)	(学校で交流会) 追悼式典(キャンドルセレモニー)	ジトーミル
7	26日(火)	チェルノブイリ原発事故 25周年祈念式典	ジトーミル
8	27日(水)	キエフ市内観光(チェルノブイリ博物館)	キエフ
9	28日(木)	午後 キエフ → ヘルシンキ	ヘルシンキ
10	29日(金)	午後 ヘルシンキ	機中泊
11	30日(土)	→ 朝 中部国際空港 帰国	

「ナロジチ地区 被ばく調査 2010 年夏・秋 訪問編」



独立行政法人 労働安全衛生総合研究所 木村真三
皆さん、本誌上で 6 月に調査開始のご報告をしたことを覚えてい
る方もいらっしゃると思いますが、竹内さんの絶妙なコーディネート
のお陰で、調査は順調以上の成果を見せています。

我々調査団は一貫して、同地区住民の罹患率を調べることに
より放射能被害を明らかにし、科学的アプローチのもと、現地の状況
を広く伝えることを目的としています。ここで、これまでの調査に参加
された方々を紹介いたします。春・夏 2 回の調査に参加された獨協医科大学公衆衛生学講座の三浦先生は、
過去 10 年間農村地域に出かけ、生活習慣病調査をしてこられた経験を生かし、私の良きアドバイザーとして同
行していただいております。もうひとり、私の前職である放射線医学総合研究所時代の元上司であるサワーさんは、
インド出身の分析化学の専門家です。これまでも、チェルノブイリでウランの分析を手がけており、チェルノブイリの
一人として心強い存在です。

秋には、お二人の医師が調査に加わってくださり、調査に深みを持たせることができました。名古屋大学の市原
学先生と、その奥様である三重大大学の市原佐保子先生です。学先生は、労働者の化学物質ばく露による神経
毒性を研究されている、社会派の医師です。奥様の佐保子先生は、名古屋大学で循環器内科医師を長年勤
められていましたが、現在は心疾患患者の早期発見を目指し、遺伝的要因を探る研究をされています。ナロジチ
では心疾患等あらゆる病気が増加していることに注目して、専門家として参加していただいております。

さて、夏の調査では、国立ジトーミル農業エコロジー大学のディードゥフさんと、汚染地域の状況調査を行い、秋
に行う汚染土壌の採取地を決めました。日中 35 度を越す異常気象の中での調査は、予想以上に厳しく、測定
器を紛失してしまうミスをしてしまいました。私のミスをカバーするために、ディードゥフさんと竹内さんが、地元のおじ
さんおばさんや子ども達まで巻き込み大捜索しましたが、まさに神隠しのように忽然と消えてしまいました。結局、見
つけられず仕舞いでしたが、仲間の気持ちは不思議とまとまりました。

中央病院では、罹患率を割り出すために個人カルテの公開を依頼しましたが、「病院長レベルの判断ではない」
と、ジトーミル州の保健省預かりとなってしまいました。いろいろあった夏の調査から 2 ヶ月後の 10 月に、再度ナロジ
チに行くことになったわけですが、病院に向かう車の中でも、どう説明すればもっと協力してもらえるかという問題が、
頭を駆け巡っていました。意外にも、汚染地域 1 万人の個人カルテから、汚染レベル毎の有病者数・罹患患者数を、
事故前から 08 年まで、5 年刻みで得られることになりました。しかも、12 月 10 日にはデータが出揃う予定です。

また、小児に関しては、ウクライナ医科学アカデミーのステパノフ教授を訪ねたのですが、ナロジチの子どもの中
には最大 65,000 ベクレルの内部被ばくを負っている子どもがいるとのこと。院内で、我々を囲み無邪気にはしゃいで
いる子ども達も、実はヒバクシャであり、大きな病気を抱えている現状を見て、なんともやるせない気持ちで病院を後
にしました。帰国前、在ウクライナ日本大使・参事官(医務官)・一等書記官・三等書記官とも面談し、ナロジチの
現状を伝えてきました。大使館には、NHK のディレクターに同行していただいたお陰もあり、大使は他の予定をキャン
セルしての面談でした。

最後に、ナロジチを通じて原子力開発の犠牲者となった人々が、原子力の恩恵を受けることなくひっそりと暮らし
ている姿が印象的でした。来年は、1 月 9 日からウクライナに飛ぶ予定ですが、更なる事実を突き止め、ナロジチ住
む人々のお役に立てるようがんばります。

チェルノブイリが教えること

(名古屋大学 市原 学)

ウクライナ、キエフに到着し、翌日、チェルノブイリ原発事故の博物館を訪問した。入口から入ったすぐのところには、原発事故によって廃村となってしまった多くの土地の名が掲げられていた。原発事故直後に事故処理を行った人びとについての、展示があった。十分な情報を与えられないまま、事故直後に現地入りし、多くの人が死亡していることがわかった。彼らは、英雄として死後表彰されている。原発近くに住む人たちにも、事故直後情報はすぐには与えられず、しばらくしてから、十分な理由も説明されないまま準備されたバスに乗り、事実上移住させられてしまった人が多くいることも知った。

なぜ、この事故が防げなかったのか、そしてなぜ、事故発生時、人命を何よりも優先する処置がとれなかったのか。一方、展示によって、事故前のチェルノブイリが、当時の国の科学技術力を誇示する存在であったことも理解した。人命の不尊重と科学技術の誇示、どのように科学が歪められ、そこに大きな嘘を生んでしまっていたのかについて、私は暫く考えた。

さらに私は、ジトーミル・コロステン・ナロジチを訪問した。自給自足の生活をし、土地そのものが生活条件の一部どころか、自らの生命活動の一部となっている人々。これらの人々にとって、その地を離れることは考えられないこと



<チェルノブイリ博物館内>

なのかもしれない。木々は秋に葉を落とし、枯れた葉は土壌となり、再び木々に吸収される。その循環の中に放射性物質は入り込み、抜け出せなくなっている。

チェルノブイリ事故は、私たちの生存が危うくなる事態を私たち自身が引き起こす可能性が、存外に小さくないこと、そしてその可能性を小さくするためには、少数の賢者の力では限界があり、より多くの人々が聡明となり、それぞれの経験と知見を寄せ合う必要があることを教えている。

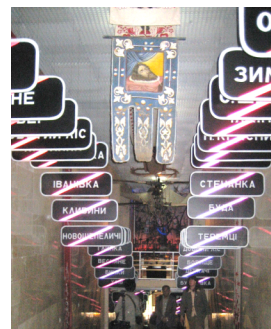
<COP10に参加して>

10月11～29日、この名古屋の地でCOP10が開催されました。最終日の深夜まで続いた本会議では、何とか「名古屋議定書(遺伝資源の利用で生じた利益を公平に分配する)」や、「愛知ターゲット(生物多様性の保護地域を拡大し、生物の生息地が失われる速度を少なくとも半減させる)」などの採択にこぎつけ、議長国の面目を保ちました。しかし、これからどのように数値化し、魂を入れていくことができるのか、評価はその後になるでしょう。さて、私達チェル救も、10/18・19の2日間、本会議場外に仮設されたテント群のひとつで、「菜の花プロジェクト」を中心にPR活動を行いました。そもそも、チェルノブイリの事故による被害は、まき散らされた人工の放射能が、「大地→草→牛→ミルク→人間へ」、あるいは、「川→プランクトン→魚→人間へ」など、さまざまな食物連鎖や生態系による濃縮を経て、人間に回帰する、即ち、「生物多様性」であるがゆえに、拡散しているとみることができま

す。そして、私達の「菜の花プロジェクト」はこれを逆に利用して、「菜の花による吸収→濃縮」「メタン菌による発酵→分解」などにより、放射能を分離・回収し、大地を蘇らせようとする試みです。まさに、「生物多様性」をキーワードとして、人間の生活は良くもなり、また悪くなる。…そんなお話をしました。



(J)



<失われた町村の名前>

バイディーゼル燃料（BDF）とバイオガスの進捗状況（原 富男）

直近11月までのBDFとバイオガスの進捗状況を報告します。



〈窓ガラスには「BDF で運転中」のステッカー〉

バイディーゼル燃料の製造

今年、BDFの製造は3回行われました。一度目は、土地管理ステーション(以下ステーション)のBDF担当者アナトリーさんと日本側竹内さん・原。二度目・三度目は、アナトリーさん・デイドゥフさん・竹内さんです。今年と昨年の違いは、昨年は初めてのBDF製造ということで、原料のナタネ油を地区外のオブルチ地区から購入したのに対し、今年は、我々自身の畑で栽培収穫したナタネを、自前の搾油機で搾油し、それを原料としてBDFを作ったことです。造られたBDFは、既にステーションのトラックやト

ラクター(写真)などの燃料として利用されています。これで、技術的には問題なくBDFの製造はできることになりました。しかし、課題はいくつかあります。それは、

- ① 製造に使う薬品の準備
- ② 現地主導の製造
- ③ BDFのPRとステーション以外での利用

の3点です。

まず、製造に当たっていつも問題になるのは、塩酸などの薬品が届かない・遅れるといった準備不足があり、予定通り製造に着手できないということ。また、製造に当たる現地担当者の機械操作が不慣れで、これまで日本側スタッフが付き添ってきたこと。更に、造られたBDFはステーションでは利用されているが、ナロジチ地区のほかの場所では使われておらず、地区の中でBDFが認知されていない…などの問題があります。①の薬品などの準備不足は、「ウクライナでは薬品の管理が厳しい」という事情はありますが、ウクライナ独特のその場しのぎの体質もあります。②の製造にする体制ですが、現地担当者が機械に慣れていないため、日本人がいなければ製造しない、ということもありました。また、③は、①②などの事情から、未だ今期3回しかBDF製造ができなかった、ということも一因となっています。しかし、現地スタッフも製造に慣れつつあるので、今期3月末まで加速度的に製造は進むでしょう。

バイオガス製造と廃棄物(放射能)処理

バイオガスは、昨年辛うじてガスは発生したものの、安定的に発生できずに冬を迎え、稼働を断念したという経緯がありました。今年は安定してガスが発生できるよう、7~8月に私と竹内さんが現地に派遣され、発酵槽の内部の点検・掃除、運転上のチェック、加温装置の設置などを行ってきました。これに続き、宮腰さんが「原料の投入と運転管理」に派遣され、9月19日には安定的にバイオガスを発生させることができるようになりました。その後、現在に至るまでガスは発生していますが、問題が無いわけではありません。まず、1) 加圧に設計上の問題があり、今後その対策をとらなくてはならない。次に冬場にガスを多く安定して発生させるためには、2) 加温の問題があります。装置は、土中に魔法瓶を埋めたような状態で断熱され、直接外気には晒されないものの、外気温マイナス20度~30度の中でガスを発生させ続けるには、工夫が必要です。昨年は、加温装置も無く、冬に運転を断念しましたが、今年は加温装置を設置し、更に加温した原料も投入しています。この方法でガス発生を継続できるかが課題であり、実験を継続しています。



来年は、装置の本来の目的である、3) ナタネバイオマス投入で（新設されたナタネバイオマスの保管小 ますを得る実験と、4) 廃液からの放射能除去実験も加わることになり
ます。10 月には、ラスキ村のバイオガス装置の管理用建物（貨車）の隣に、スイスの財団の助成金による、
ナタネバイオマスの保管小屋が建設されました。保管小屋ができたことで、来年はナタネバイオマスの保管と
粉碎をこの小屋で行うことができるようになり、原料の投入が容易になります。保管小屋は、ナタネバイオマ
スの運び入れを待つばかりになっています。

来期の順調な稼働をめざして！

BDF もバイオガスも、技術的には重要な問題点を克服しつつあります。今後は、何よりも運用が大事になり、
ナタネ栽培と BDF・バイオガスを、上手に関連させて運転しなければなりません。年末年始の時間を使い、
プロジェクトの残りの課題を整理し、来期の進め方について現地側と相談するため、2 月上旬に河田さん
とともに現地を訪問する予定です。

去年は、BDF もバイオガスも「とりあえず動いた」という段階でした。今年は、残された課題はありますが、
BDF もバイオガスも「形になった」ということができるでしょう。7～8 月に竹内さんとともに私が現地入りし、加
温装置や発酵槽の掃除などをした時期にはまだ形にならなかったものが、今、BDF もバイオガスも形になっ
ています。バイオガスで奮闘された遠藤さん、その後の無理難題を引き受けていただいた宮腰さんと竹内さん
の頑張りで、大きく前進できたことを大変嬉しく思っています。このプロジェクトに寄せられた皆様のご協力
に、感謝申し上げます。来期もよろしくお願ひします。

以下に、信濃毎日新聞(11 月 19 日)の記事を紹介します



「菜種油、放射性物質含まず」

チェルノブイリ汚染地で NPO が実証

県内を含む中部地方の住民有志らでつくる NPO 法人「チ
ェルノブイリ救援・中部」（事務局・名古屋市）が、1986
（昭和 61）年に原子力発電所事故のあったウクライナで進
めている実験で、放射能汚染物質を成長過程で吸収した菜
の花でも菜種油は汚染物質を含まず、安全に利用できるこ
とを実証した。

理事長の小牧崇さん（62）＝伊那市＝は「汚染地の有効
活用に弾みをつけたい」としている。「救援・中部」理事
の河田昌東（まさはる）・四日市大講師（環境科学）によ
ると、植物は土壌からカリウムやカルシウムを吸収する際、
化学的性質の似た放射性物質のセシウム（Cs）137 やスト

ロンチウム（Sr）90 を区別せずに吸収する。このため、チェルノブイリ原発周辺では事故後、
農作物による体内被ばくの危険性が指摘されてきた。救援・中部や同国立ジトーミル農業生態
学大などは 2007 年、ナロジチ地区の畑 4 ヘクタールで菜の花の栽培実験を 5 年計画で開始。
河田さんによると、種から搾った油の放射エネルギーは Cs137、Sr90 とも検出限界を下回り、検出で
きななかった。ともに水に溶けた状態で吸収されるため、油と離反するとみられるという。汚染
物質をより吸収しやすい条件を調べるため、畑は 5 区画に分け、肥料の成分を変えて栽培。
Cs137 の吸収量は、性質の似たカリウムを与えない区画の方が、与えた区画より多かった。実
験は汚染物質吸収による土壌浄化促進が狙いだったが、土壌中の汚染物質質量に対し吸収量は期
待したほど多くないことも分かったという。小牧さんは「何年かで畑をきれいにするというわ
けにはいかないようだ」と説明。京大原子炉実験所（大阪府）の今中哲二助教は「放射能除去

としてはそれほど有意義ではないかもしれないが、汚染地の有効活用、地域活性化としては意味がある」とする。救援・中部などは08年、同地区に菜種油からバイオディーゼル燃料を作る装置を導入、発電機などの燃料に使い始めた。メタンガス発生施設も造り、今年から牛ふんなどを使って稼働。軌道に乗れば菜種の油かすや茎なども投入してガスを利用し、最終的に残る汚泥を低レベル放射性廃棄物として処分する計画だ。来年4月に事故発生から25年となるのを前に、実験の中間報告を取りまとめている。小牧さんは「ゆっくりでも現地で取り組みが広がるよう、菜の花利用の仕組みを確立させたい」と話している。

財団法人 大竹財団 助成金申請 (29万6,364円) の交付が決定しました！

今年の4月、ナロジチ地区中央病院から、以下のような要請書が届きました。

『2010年前半期の当病院の暫定予算によれば、医薬品購入のための金額は35,800グリヴナ(約43万円:1グリヴナ=¥12)／年ですが、これでは救急医療用のものしか入手できません。

当院の支出中、2010年前半期には、医療機器購入経費は見込まれておりません。そのため、当院では医療機器更新の可能性がありません。』

私たちは、「具体的にどの様な機器を購入したいのか?」「なぜそのような機器が必要なのか?」「その機器を購入した場合、どのような効果が期待できるのか?」などについて、さらに調査を行いました。

8月下旬には、大竹財団の担当者の方と、電話やメールのやり取りを行い、財団事務局の担当者から、理事会で申請内容が理解されやすいように、丁寧なアドバイスを受けました。

9月には、救援・中部の代表団派遣があったので、ナロジチ地区中央病院を訪問。医療現場の現状を調査して、写真を添付した報告書を作成し、10月1日に申請書を再提出しました。

同月27日、担当者から「臨時理事会で承認を受けた」というメールがあり、11月11日交付金が振り込まれました。(美)

申請した医療機器は、以下のような内容となっていますが、ナロジチ地区中央病院にとっては、現状に即した価値のある支援になると確信しています。

1. 検査用計量器(レンピペット)

1.5ml、5-50μl、100-1000μl /各1 計3組

2. サーモスタット 1台

3. 小児用 カフ付血圧計 2台

4. 小児用 電子体重計 2台

5. 小児用 手動人工呼吸器(アンビューバッグ) 1台

6. 電子吸引器 2台

7. 超音波吸入器 2台

(美)



<ナロジチ地区病院で使用している
「電子吸引器」(2010.09.21撮影)>

財政再建(委)からの報告

① 寄付金件数、金額減少 より一層のご協力を!!!

私たち「チェルノブイリ救援・中部」の活動が、皆様方からの寄付金と助成金によって成り立っていることに、改めて感謝申し上げます。(11ページの「上半期収支報告書」をご覧ください)。厳しい経済環境の中で、この数年間、比較的安定した寄付金のご送金をいただいていたのですが、今年度は7月以降の金額(前年比▲31%)・件数(前年比▲33%)ともに、落込みが大きく苦慮しています。現在の財務状況から、今年度の活動に支障はございませんが、来年度以降の活動基盤を強化してゆく為にも、年末から新年にかけて、皆様方のより一層のご支援ご協力をお願いいたします。

② 「ポレーシエ購読者 ご紹介キャンペーン」を継続します!!

前号にて、「ポレーシエ購読者をご紹介ください」とお願いしました。10月末現在で2名の方より3名の紹介者を得ました。残念ながら、芳しい結果ではありませんでしたが、購読者拡大に向けて、引き続き「ポレーシエ購読者 ご紹介キャンペーン」を継続していきます。ご紹介いただいた方には、牧歌的な「ナロジチの絵葉書」(4枚組)をお送りさせていただきます。

1名でも多くご紹介いただけますよう、改めてお願いいたします。

③ 9・10月寄付金、一坪キャンペーンのご報告

10月末現在 74名(154口)です。3月末まで募集を行っています。

寄付金は、9月97,500円(14名)、10月224,500円(39名)でした。皆様のご支援に、心から感謝いたします。

(神谷)

始まる前は成立が危ぶまれていた、カルタヘナ議定書締約国会議（MOP5）も、生物多様性条約締約国会議（COP10）も様々な対立と困難を何とか乗り越えて、どちらも採択された。採択にこぎつけた議長国日本の努力を賞賛する声はあるが、これが実効性を伴った内実を持つためには、これからが正念場である。何が問題なのかを探る。

● 採択にこぎつけた原動力は各国の危機感

連載 73 号でも取り上げたが、MOP5・COP10 の主な争点はあらかじめ分かっていた。MOP5 では遺伝子組換え生物がもたらす被害（損害）の責任と修復についてであり、COP10 では遺伝資源利用による利益の公正・公平な配分、について先進国と途上国が合意できるかどうかであった。準備段階で行なわれた、クアラルンプールとモントリオールでの事務レベル作業部会でも紛糾して合意は出来ず、採択は名古屋会議の本番に持ち越された。議長国日本の力量が試された所以である。筆者が参加していた MOP5 では、準備段階でほぼ合意が得られ、本番での採択はほぼ確実にしたが、終盤での採択の瞬間、参加者が立ち上がって拍手し、議長席では抱き合い肩を叩き合って喜ぶ姿が印象的であった。COP10 では、時間切れすれすれの真夜中によりやく合意にこぎつけた。強硬に反対していたアフリカ諸国が、妥協に応じた結果である。議長国日本は、MOP5 でも COP10 でも、途上国と先進国との妥協を促すために、遺伝子組換え生物による損害や生物資源利用による利益の範囲を、あえて曖昧にした議長案を出した。今後、各国が国内法を整備し具体的内容に触れざるを得なくなれば、対立は再燃するだろう。しかし、曲りなりにも各国が採択に同意した最大の理由は、今回両議定書が採択されなければ、遺伝子組換え生物が野放しになり、どのような問題が起こるか分からないといった危機感や、生物多様性保護が国際的に合意されなければ、地球温暖化とあわせて近未来の人類の生存が危うくなる、という人類共通の危機感である。しかし他方、生物多様性保護が途上国と先進国との金銭のやり取りに終始している限り、本質的な解決には遠いと言わざるを得ないのも事実である。

● 力を発揮した NGO

参加者数で過去最大の 8,000 人と言われた今回の会合では、各国政治家たちに混じって NGO 関係者の参加が目立った。国際会議場では、NGO のための控え室や会議室も用意され、本会議と並んで誰でも自由に参加し論議の行方を見守ることができた。会議場の外では交流フェアが行なわれ、行政や企業に混じってたくさんの NGO のブースが設けられ、活動の報告や紹介が行われた。しかし、会議場とブースの空間は周りを高い壁で囲まれ、一般の通行人等には縁遠い存在となったのは残念であった。テロ対策などが理由だが、これでは開かれた国際会議とはいええない。国内の NGO では、MOP5 市民ネットが市民提案や場内でのサイドイベントを通じて、海外参加者に遺伝子組換え生物の問題点を訴え、CBD 市民ネットが提案した、「里山イニシアチブ」や「生物多様性の 10 年」などの目標が採択され、大きな成果をあげた。ドイツの NGO として、これまで MOP・COP で大きな影響力を発揮してきたクリスチーナ・フォン・パイツェッカーさんも、日本の NGO の活動を大いに評価していた。

● カルタヘナ議定書国内法の改定に向けて

争点を曖昧にした議長国日本は、2 年後にインドで行われる次回会合まで、議長国を務める。日本政府は、「現在のカルタヘナ国内法を変える必要はない」との見解だが、これは大きな間違いである。そもそもカルタヘナ議定書では、遺伝子組換え生物の対象は「人間を含む全ての生物」である。ところが日本の国内法では、「農作物と人間」を除外しているのである。その上、「遺伝子組換え生物による損害の対象」は、江戸時代以前から国内に存在していた「固有種」に限る、という。まさに、考古学のような論議が、政府内ではまかり通っている。

こうした姿勢では、生物多様性はおろか、組換え遺伝子による種の破壊にも全く対応できない。勿論、世界にも通用するはずがない。国内法改定は必須である。

（河田）

竹内さんのウクライナ便り

10月末の統一地方選挙の結果、政権与党の「地域党」は24州のうち18州の州議会で第1党となり、クリミア自治共和国の議会では、圧倒的多数の議席を得ました。今回の選挙は小選挙区比例代表並立制で行われ、出口調査による全体の得票率では、「地域党」は32～36%程度、「ティモシェンコ・ブロック」が13%程度、その他の政党は5～6%という数字だったのですが。「地域党」によるメディア操作が最近また問題になり(野党関連



<夏の一時帰国。豊橋市内にて(2010年9月)>

の報道を控え、政府関連のニュースは肯定的なものに限る)、ある州では野党の州議会議員候補が暴漢に襲われる事件があるなど、陰に陽に不正工作が行われていたと、独立系・野党系のメディアは主張しています。アメリカの欧州・ユーラシア問題担当國務長官補佐官が、「今回の地方選は民主主義の規準を満たすものではなかった」と発言したという報道もあり、それによると、彼は「今回の選挙は、例えば今年の大統領選と異なり、公開性と公正さの規準に合致していなかった…我々の知る限り、国際的な規準に適合するような選挙法は、ウクライナには存在していない。そのことはすでにウクライナ政府に伝えてある。我々は、この件で支援を提供する用意がある」と述べた由。欧州委員会の選挙監視員派遣団代表も、「今回の地方選は同委員会の規準を完全に満たすものではなかった」との発言をしています。

ちなみに、この選挙の投票率は50～55%と低く、国民の政治不信としらけ気分の表れと思われていましたが、11月後半になり、IMFから新たな融資を受けるにあたっての条件の一つであった、新税法が最高会議で採決されるや、各地で自然発生的な反対集會が続々と開かれ、主に小企業主や零細小売業者などが、キエフでは都心のメイン・ストリートや独立広場を占拠するという事態が発生しました。この新しい税法を適用されれば、とても商売が成り立たないというのが彼らの認識です。しかし、ヤヌコーヴィチ大統領は、「対話の用意はあるが、どの程度要求を受け入れられるかは疑問」という趣旨の発言をしており、アザロフ首相に至っては、「ウクライナほど低い課税率は、ヨーロッパのどこを探してもない」と公言、「議会外の抗議活動は検討に値しない」という強気のコメントで、抗議行動の参加者の怒りを買っています。しかし市場などでささやかな店舗を開いている人たちが、小額の日々の稼ぎをふいにして長期の抗議行動に参加できるとも思えず、騒ぎが収まるのをただ待つというのが政府側の方針と思われる。「既成政党があてにできないのであれば、中小企業の利益を代弁すべき政治勢力を形成し、議席を得て行動しなければ。何か問題が起きるたびに直接行動に出るのでは、真の解決にはならない」という某週刊誌の論説記事もあり、正論ではあると思いますが、しかし、明日からの生活が成り立たなくなるという危機感に駆られている人たちには、あまり訴える力を持たない主張でしょう。

ちなみに、別の週刊誌に出ていた「何を一番心配しますか」という世論調査(複数回答)では、1位がインフレ(51.6%)、2位が失業(29.6%)、3位は「まっとうに生活するためのお金が足りず、借金を強いられること」(26.5%)というもの。4位以下は「国政の危機・国の混乱」(約20%)、「汚職・賄賂」(18%)、「[国の]生産力の低下」(17.7%)、「医療サービスの低い水準」(16.6%)、「犯罪」(12.4%)、「グリヴナ・レート不安定」(10%)と続きます。金融危機から時間が経ち、経済指標はある程度落ち着きを見せているとはいえ、人々の不安はまだ払拭されていないようです。(11月26日)

事務局便り

通勤路の鶴舞公園に、見事な枝振りのイチヨウの木がある。今、黄葉で息をのむ美しさ。

樹木はそこに根をおろし、生い茂っているだけで十全だが、人はなかなかそうはいかない…。

事務局は、「週一ミーティング」をこの秋から始めた。今頃？？と言われそうだが、忙しさにかまけて、いつの間にかこの大切な時間を失っていた。慌しい時をすごしていると、肝心なことを忘れる。いつも何かに追われるように仕事をしている時、往々にして問題が起きる。そして、起きた…そんな時は、立ち止まるしかない。立ち止まって、じっくり振り返る「時間」を作る。そこで、問題や状況を共有する。腹を割って話す…。とりあえず気がついたから、スタート！
(山盛)

お宝ネット 発送先および連絡先

〒399-4511

上伊那郡 南箕輪村 南原 9955-2

原 方

「救援・中部 お宝ネット」宛

TEL 0265-73-9355

Fax 0265-73-9352

* 引き続き、お宝を募集しております。

これまでにネットで売れたベスト3は、

1位 SL模型

2位 オーディオ製品

3位 LPレコード

その他 食器・古本・絵画など。

金額では、絵画・オーディオ製品・SL模型の順で高値でした。

今回は、「こんなものがお宝に！？ リスト」を同封しました。参考にしてくださいね。

このお宝リストを片手に、年末に向けて“ご自宅お宝発掘大作戦”をよろしく願いたいしま～す。

生もの以外なら、何でも扱います。

編集後記

☆「エコポイント」なんて人ごとだと思っていたけど、テレビやエアコンがタイミングよく(?)故障…。おかげで、ほら地デジアンテナの配線が！ほら設置が！って、工事屋さんが超プライベート空間に押し入ろうとする。さあ～たいへん(汗)。年末を待たずに想定外の大掃除、てんやわんやの大騒ぎ。(美)

☆姉の家が子犬を飼いはじめた。今どきの犬は、ワクチンを何度も接種したのち、ようやく外に出られるらしい。そして遊ぶときのマナーとして、まず人間が手を洗う。そんなに過保護でいいのか～～ (佳)

☆COP10 関連で、開発 NGO と環境 NGO が、セクターを越えて連携することを考えた。開発 NGO の活動する国際協力の現場には、生物多様性問題の裏に貧困・南北問題あり。途上国・先進国の地域とも、生物多様性は南北問題。「つながる命」は、「人と人のつながり」があってこそ守られるのだろう。(と)

☆韓国の平安哨戒艦沈没事件、尖閣諸島の漁船衝突事件、北朝鮮の砲撃事件…と、日本の周辺がキナ臭くなっている。日本のマスコミは、待ち望んでいたかのように、「日米同盟」抑止力強化の大合唱である。しかし、戦争は決して偶然には起こらない。戦争を好む人間達がいる。戦争で金儲けを企む人間達がいる。戦争を挑発する人間達がいる。彼等は今、金融支配に失敗して、借金返済に窮しており、戦争で何もかもリセット(ご破算)したくてたまらない人間達である。あの「911 事件」を自作自演したように…。絶対に、彼等の挑発に乗ってはいけない。
(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052)871-9473